

# トルコの村の家族構成と女性

— 西黒海地方〇村の事例より —

中山 紀子\*

## Family structure and women in a Turkish village:

a case study from a village in the West Black Sea area

Noriko Nakayama

### 1. はじめに

トルコの村の家族に関する研究は家族の形態に関するものが多く、なかでも拡大家族か核家族かに注意が払われてきた。そしてトルコの家族形態は、中東地域で優勢であるような拡大家族が多数を占めているものではなく、むしろ核家族という形態が支配的であることがあきらかになっている。とくに、松原は、南西アナトリアの村でのデータを複数の先行研究からのデータを踏まえて比較検討することによって、トルコの村落社会において核家族および直系家族が基本形態となっていることを実証的に示した[松原 1975: 183]。

本稿では、松原の分類法を援用しながら、筆者が1992年6月から1993年6月までの一年間現地調査を行ったトルコ共和国ゾングルダク県〇村の家族構成を検討する。その際に注目するのは女性のありかたである。筆者は、別稿において、世俗化したムスリム大国であるトルコがイスラームを遠ざけるという「近代化」を進めていくなかで女性のありかたが「近代化の試金石」として象徴的な意味をもったことを議論した[中山 1995]。ナショナルなレベルでは、イスラームを遠ざける世俗主義、世俗主義への異議

申し立てとしてイスラームを再評価するイスラーム主義が台頭し、それぞれが独自の女性のありかたを主張している。これらは正反対の方向ではあるものの共にイスラームに対して自覚的であり、女性のありかたとイスラームを関連づけている。一方で、筆者が調査した〇村においてはイスラームは人々の生活に溶け込んだいわば無意識の軸であり、人々が女性のありかたとイスラームを関連させることは少ない。むしろ、女性のありかたに対してより自覚的であり、さまざまな言及する[中山 1994]。イスラームと切り離れたかたちで言及される女性のありかたのなかで、本稿では特に家族構成を中心に分析を行う。なお、調査地は人口477人、世帯数85の山村で、トルコの中では中規模の村である。この村は、炭坑労働、ドイツ出稼ぎ労働などによる経済的向上で、生活が変貌しつつある。主な生業は農業であるが、村の男性の多くは近くにある炭坑で働いており、兼業農家も多い。

### 2・家族構成による分類

〇村では、現在、廃屋を除いて105戸の家屋がある。そのうち、20戸には人が住んでいない。人が住んでいない20戸の内訳は、ドイツへの出

\* 文化人類学 地域、トルコ

稼ぎ労働者の所有する12戸、村に住んでいる人の2軒目の家が4戸、その他近郊の町に在住し、O村をときどき訪れる人たちの家が4戸となっている。現在人が住んでいない家屋のほとんどがドイツ出稼ぎ労働関係者のものということになる。しかもこの12戸のうち、3戸だけが古く、あとの9戸は近年新しく建築されたものである。これらの家は、ドイツから休暇で帰った際に使われ、ドイツでの出稼ぎ労働を終えたあとの年金生活をするために準備されているのである。

統計には、現在村に住んでいる人のみを対象とし、兵役中の若者、近郊の町で非熟練産業に従事するものなどは除外している。従って、家屋数85戸、人口は477人で作成している。人口の内訳は、男性215人、女性262人である。年齢別分布を図1に示したが、若者の層が目だつのはトルコ全体の特徴と共通している。O村の家族の平均構成員数は、5.6人である。

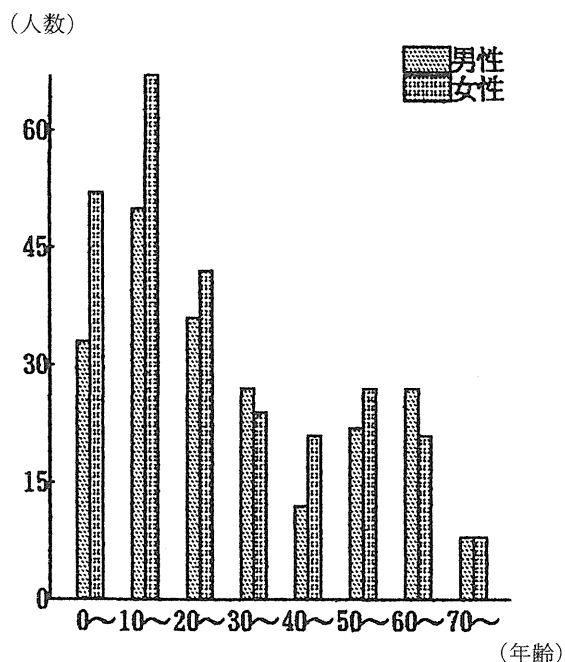


図1 O村の男女別年齢分布(1992年12月現在)

松原は、南西アナトリアの村を調査し、家族を6つのカテゴリーに分けて分類している。A類として、やもめや寡婦など一人ぐらしの世帯、いわゆる欠損家族、B類として、オットとツマおよびそのコドモからなる、いわゆる核家族、またオットとツマのみからなる世帯もここに含む。C類として二世帯以上にわたる直系家族、基本的にはオットとツマおよびオットのチチ・ハハからなる家族である。ここには、オットのチチ・ハハが健在でオットの未婚のキョウダイ・シマイが同居している場合と同居していたオットのチチ・ハハのどちらか一方が死亡などのため欠けた場合も含む。D類として、オットとツマ、それにオットのキョウダイとそのツマなどを基盤として成立している家族をいれる。いわゆる大家族にあたる。ここに、オットのチチ・ハハはすでにいないが、オットの未婚のキョウダイ・シマイが同居している場合も含む。E類として、C類とD類がくみあわさったかたち、つまり、直系家族と大家族が並存している家族をさす。すなわち、すくなくともオットとツマ、オットのチチ・ハハ、オットのキョウダイとそのツマの、三対以上の夫婦が同一世帯を営む家庭をさす。F類として、うえの分類にはいりきらない家族構成をもつ世帯を示す〔松原1975:174-175〕。なお、直系家族に関して本稿では、夫方居住と妻方居住、および養子夫婦をもつその他の3つの下位区分を新たに設けた。

松原の設定した分類法をもとにO村の家族をみていくと、以下ようになる(次頁図2、表1参照)。O村においては、A類(欠損家族)6%、B類(核家族)37%、C類(直系家族)48%、D類(大家族)4%、E類(直系家族+大家族)1%、F類(その他)1%となり、核家族と直系家族をあわせると84%にもものぼる。これは松原の調査した南西トルコの村における、

核家族と直系家族をあわせたデータ（88％）とほぼ一致する。また、松原が参照した先行研究からの8つの村のデータとも一致している（表2参照）。ただし、O村と松原の調査、および参照した村とでは、核家族と直系家族の割合が逆転している。O村では、核家族37％、直系家族48％であり直系家族の割合の方が高いが、松原の村では核家族が60％、直系家族が28％と圧倒的に核家族の割合が高い。松原が参照した8つの先行研究によるトルコ各地の村のほとんどが、直系家族より核家族の割合が高かった。唯一の例外がボル近郊黒海沿岸の村Akçakocaであり、同じく黒海地方の山村であるO村と同様に、核家族より直系家族の割合のほうが高い。

今後より多くの資料の増加を待たねばならぬが、ここで黒海地方の家族の特徴として、核家族に対する直系家族の優位性をあげることは可能であろう。とはいえ、O村の核家族の37％という割合も決して低いものではない。一方、拡大家族の出現率は極端に低い。拡大家族（D類）および、拡大家族と直系家族の並存する家族（E類）、その他（F類）を合わせても7％しかない。O村にしても、拡大家族はおろか、直系家族さえも核家族に押されがちであるといえる。それでは、この家族の構成による分類から、具体的に家族のなかにおける女性のありかたをみていこう。

| 家 族 の 種 類 | %  |
|-----------|----|
| 欠損家族      | 6  |
| 核家族       | 37 |
| 直系家族      | 48 |
| 拡大家族      | 5  |
| 直系＋拡大家族   | 1  |
| その他       | 1  |

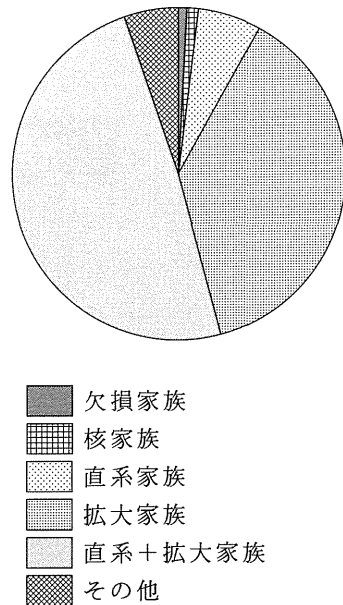


図2 O村の家族の種類

表 1 家族の種類による分類

|                                      | 戸 数  | %     |
|--------------------------------------|------|-------|
| A.欠損家族                               | (5)  | (6%)  |
| 男性                                   | 2    | 2%    |
| 男性, 孫娘                               | 1    | 1%    |
| 女性, 孫娘                               | 2    | 2%    |
| B.核家族                                | (31) | (37%) |
| 夫婦, 未婚の子                             | 22   | 26%   |
| 夫婦                                   | 6    | 7%    |
| 母親, 未婚の子                             | 3    | 4%    |
| C.直系家族                               | (41) | (48%) |
| C-1.夫方居住                             | (34) | (40%) |
| 夫の両親, 夫婦, 未婚の子                       | 7    | 8%    |
| 夫の両親, 夫婦, 未婚の子, 未婚の兄弟姉妹              | 6    | 7%    |
| 夫の両親, 夫婦, 未婚の兄弟姉妹                    | 3    | 4%    |
| 夫の両親, 夫婦, 未婚の兄弟姉妹, 未婚の夫の叔父           | 1    | 1%    |
| 夫の両親, 妻, 未婚の子                        | 4    | 5%    |
| 夫の両親, 妻, 未婚の子, 未婚の兄弟姉妹               | 2    | 2%    |
| 夫の母親, 夫婦, 未婚の子                       | 4    | 5%    |
| 夫の母親, 夫婦, 未婚の子, 未婚の兄弟姉妹              | 3    | 4%    |
| 夫の母親, 夫婦, その息子夫婦, 未婚の子               | 2    | 2%    |
| 夫の母親, 妻, 未婚の子                        | 2    | 2%    |
| 夫の父親, 妻, 未婚の子, 未婚の兄弟姉妹               | 2    | 2%    |
| C-2.妻方居住                             | (5)  | (6%)  |
| 妻の両親, 夫婦, 未婚の子                       | 2    | 2%    |
| 妻の両親, 夫婦, その娘夫婦, 未婚の子,<br>未婚の兄弟姉妹    | 1    | 1%    |
| 妻の母親, 夫婦, 未婚の子                       | 1    | 1%    |
| 妻の母親, 夫婦, 未婚の子, 未婚の兄弟姉妹              | 1    | 1%    |
| C-3.その他                              | (2)  | (2%)  |
| 夫婦, 養子夫婦, 未婚の子                       | 1    | 1%    |
| 母親, 養子夫婦                             | 1    | 1%    |
| D.拡大家族                               | (4)  | (5%)  |
| 夫婦と未婚の子, 夫の未婚の兄弟姉妹                   | 3    | 4%    |
| 兄弟夫婦とそれぞれの未婚の子                       | 1    | 1%    |
| E.直系+拡大家族                            | (1)  | (1%)  |
| 夫の両親, 2人の息子夫婦, それぞれの未婚の子,<br>未婚の兄弟姉妹 | 1    | 1%    |
| F.その他                                | (1)  | (1%)  |
| 夫婦, 夫の2番目の妻, 複数の息子夫婦, 孫,<br>未婚の子     | 1    | 1%    |
| 合 計                                  | 85   | 100%  |

表 2 他村における家族の種類との比較

(単位：％)

| 村<br>類 | 事例 1<br>(1944) | 事例 2<br>(1950) | 事例 3<br>(1952) | 事例 4<br>(1971) | 事例 5<br>(1965) | 事例 6<br>(1965) | 事例 7<br>(1965) | 事例 8<br>(1965) | 松 原<br>(1973) | ○ 村<br>(1993) |
|--------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|---------------|---------------|
| A 類    | 12.0           | 4.8            | 5.6            | 4.3            |                |                | 2.3            | 2.9            | 5.6           | 6.0           |
| B 類    | 51.3           | 55.2           | 56.5           | 39.1           | 55.9           | 64.5           | 67.5           | 79.1           | 60.0          | 37.0          |
| C 類    | 23.6           | 17.1           | 19.2           | 50.0           | 26.5           | 29.2           | 18.6           | 13.3           | 28.3          | 48.0          |
| D 類    | 3.7            | 7.6            | 6.1            | 4.3            |                |                |                |                | 0.9           | 5.0           |
| E 類    | 4.5            | 15.2           | 12.6           | 2.2            | 11.6           | 2.1            | 2.3            |                | 2.0           | 1.0           |
| F 類    | 4.9            |                |                |                |                | 4.2            | 9.3            | 4.7            | 1.6           | 1.0           |

(松原 [1975:175,182] を基に作成)

|     |         |      |                                      |
|-----|---------|------|--------------------------------------|
| A 類 | 欠損家族    | 事例 1 | Hasanoğlu村 [Yasa 1955]               |
| B 類 | 核家族     | 事例 2 | Sakaltutan村 [Stirling 1965]          |
| C 類 | 直系家族    | 事例 3 | Elbaşı村 [Stirling 1965]              |
| D 類 | 拡大家族    | 事例 4 | Akçakoca村 [Emiroğlu 1972]            |
| E 類 | 直系＋拡大家族 | 事例 5 | Oruçlu村 [Hinderink & Kıray 1970]     |
| F 類 | その他     | 事例 6 | Karacaören村 [Hinderink & Kıray 1970] |
|     |         | 事例 7 | Sakızlı村 [Hinderink & Kıray 1970]    |
|     |         | 事例 8 | Yunusoğlu村 [Hinderink & Kıray 1970]  |

## 2-1・欠損家族

A類に分類した5つの家族は、どれも高齢の男女である。全体では6％であり、非常に発現率が少ない。男性が1人で暮らしているのが2例、男性が孫娘と暮らしているのが1例、女性が孫娘と暮らしているのが1例である。老人が1人で暮らすことは稀であり、息子夫婦にひきとられることが多い。先に述べた町と村を行ったり来たりする不在家屋の4戸はみな老人であり、町にすむ息子夫婦にひきとられている。この4戸は、村に組み込もうとすればこのA類に属すだろう。男性が1人で暮らしている2例も、最近まで妻と住んでいたが死別した例と、近所に住む親族に食事の世話をしてもらっている例

である。独居老人となると孫娘が世話をしにすることが多い。孫娘がきている3戸のうち、2戸が近郊の町に在住する息子夫婦から、1戸が村内の娘夫婦から送られている。孫娘は息子の娘の場合もあり、娘の娘の場合もあり、適当な孫娘がいる方が送る。

ここで示されているのは、1人で住むことが少ないこと、老いた親と同居するのは息子夫婦であること、祖父や祖母を世話するのは孫息子でなく、孫娘が期待されていることなどである。○村には、もともと1人で住んでいる人は誰もいない。かつて家族をもっていたが配偶者との死別、あるいは、息子たちの町への移住によって1人になってしまった例ばかりである。

結婚をせず村で単独で住んでいる例はまったくない。結婚をせず、家族をもたないことは村では考えられないことなのである。

そして、ここで注目しなければならないのは、老いても女性が1人で住む例が全くないことである。これは、偶然ではなく、村の性的規範に関わるからである。女性が、男性のいない家、すなわち、夫、父親、兄弟、あるいは結婚している息子がいない家に単独で住むことは不適当なことだとみなされている。それは、女性が見知らぬ男性から襲われる危険性を高めることからである [Ilcan 1993:224]。

村の人々は初対面の人に必ず家族のことを聞く [Delaney 1991:148]。これは、村の人々が家族をもつことをもっとも重要視していることを表している。はじめて会った人に「家族はいますか」(Ailen var mı ?), 「お父さんは生きてますか」(Baban hayatta mı ?), 「お父さんの仕事は?」(Baban ne iş yapıyor ?), 「兄弟は何人ですか」(Kaç kardeşin var ?)などを矢継ぎ早に質問する。家族がいることを確かめてようやく安心するようである。一方、孤児になることがいかに惨めであるかということ強調する。「誰もいない」(kimsesiz), 「後ろ盾がない」(arkası yok) ということは、誰にとっても決定的に否定的なことなのである。このときに強調されるのは経済的な保護者としての父親の不在である。しかし、これは女性にとっては性的存在である自分の保護者の不在をも意味する。女性にとって家族をもたないことは、男性よりもさらに大きな意味をもつのである。

## 2-2・核家族

B類に分類した核家族は31戸(36%)で、2番目に多い家族構成となっている。31戸の核家

族のうち、夫婦と未婚の子からなる家族がもっとも多く22戸、夫婦のみが6戸、母親と未婚の子が3戸である。夫婦のみの6戸はすべて娘を婚出し、息子夫婦が町やドイツに住むようになった老夫婦である。村に住む若い夫婦が結婚直後に新居を構えることはほとんどなく、たいていが夫の実家に同居するため、結婚直後の若い夫婦が核家族を構成することはない。夫婦と未婚の子という家族構成をもつ22戸のうち5戸が戸主がドイツ出稼ぎ労働を経験している。

ドイツ出稼ぎ労働が村に与えた影響について、Kırayは、「出稼ぎ労働がもたらした、村における独立家族症候群(separate-house-in-the-village syndrome)は、女性の役割におけるもっとも重要な機能的変化をもたらしたもののひとつと考えなければならない。共和国のどの政策ももたらさなかったほどの規模で変化がおこった」と述べている [Kıray 1976]。たしかにO村においても、夫の両親がドイツへ出稼ぎにいつているある30代の妻は、夫の両親の管理を受けることなく「楽だ」と言っていた。彼女は同じくドイツに住む夫の弟が持ち帰ったりキュール酒を飲んだことさえある。村においては、男性はともかく、女性がアルコール類を飲むことは非常に稀である。夫の両親による管理がないことが嫁に自由を与えることが窺える。しかしこれは、裏を返せば、夫の両親による嫁である女性に対する管理の厳しさを裏付けるものである。O村では、出稼ぎに行く男性が妻を村に残すことが多かったが、これは自分の両親の世話をさせるためであった。

## 2-3・直系家族

C類の直系家族が41戸(46%)で、O村でのもっともよくみられる家族の形態である。夫婦に夫の両親、あるいは夫のどちらかの親、そし

て夫婦の子供という構成である。これに夫の未婚の兄弟姉妹が加わることがある。1戸、夫の父親の兄が同居している例がみられるが、これは、軽い障害のため結婚できなかった叔父が実家に残った例である。拡大家族が少なく直系家族が多いのは、両親が複数の息子夫婦ではなく、1人の息子夫婦と同居するからである。「末子は優しい」(En küçük çocuğu tatlı olur)という言葉からわかるように、息子たちが年齢順に職を得て家を出ていって残った末息子が両親と同居するケースが多い。しかし必ずそうなるとは限らない。ある家に最初の嫁としてきた女性は、多くの場合、夫の両親のみならず夫の未婚の兄弟姉妹と同居することになる。実家に住む未婚の娘たちよりも嫁である女性のほうが労働力の担い手として期待される。直系家族のなかで、女性は嫁として婚家に入り、やがて息子に嫁を取って姑としての地位を獲得する。

夫方居住が基本であるが、直系家族の全体戸数41戸のなかで妻方居住も5戸みられる。全体のなかでは6%と発現率は低い。これは息子がいない、あるいは息子が結婚できない場合に、娘に入り婿をとって同居する家族形態である。入り婿は「ダマト」(damat)と呼ばれる。「イチ・ギュヴェイ」(iç güvey)という言い方をすることもある。どちらの言葉も軽く揶揄されて使われる。入り婿に対する否定的な態度は多くの研究者の注意を引いている。イチ・ギュヴェイという言葉には「すこし軽蔑的なひびきがある」[松原 1975:234]し、「多くの男性が入り婿になることを不名誉なこととみなしているので、入り婿結婚を成立させるのはデリケートな仕事である」[Delaney 1991:167]。さらにダマトになったら「(ダマトは)静かに話し、人のいうことを素直に聞くことが期待されて」[Ilcan 1993:256]おり、性格ま

で矯正される。経済的に妻に頼るとみなされて、村のなかで下にみられることが多いからである。

○村においても、入り婿として結婚した男性はそれが仇名となっていくまでも、陰で「ダマト」と呼ばれ続ける。○村のある女性は「入り婿のジャケットは橋のたもとにおかれる、すぐに逃げられるように」(Damadın ceketi köprü başında olur, alıp kaçar)という言い回しをして、入り婿になる男性の苦勞の多さを表現した。入り婿になる男性は、兄弟がたくさんいる貧しい家庭出身のことが多い。入り婿になる場合は嫁をもらうときには必要な結納金が免除され、結婚式の費用を全額出す必要はない。

一方、自分の生まれた家に残る女性は、結婚して夫の家で嫁として仕えなければならない女性と違い、結婚後も自分の両親、兄弟姉妹と親密な関係をとることができる。しかしながら、入り婿を取った女性が安泰な生活を送っているとは限らない。逆に入り婿である夫と自分の両親に挟まれて苦勞することが多い。ある入り婿をとった女性(38歳)は、「自分が嫁に行って苦勞するほうがどれだけましだったか」と述懐している。また、ある入り婿をとった家では、入り婿夫婦と娘の両親が「話していない」状態に陥っている。

このような「入り婿」に対する否定的な見方、または入り婿婚の成立の困難さは、村の人々が考える男性の優位性という性的規範を脅かすからである。嫁に出て行ってしまう娘が、「エル・クズ」(el kız), すなわち「よその娘」と呼ばれることと対称的に、跡取り娘のほうは「エヴ・クズ」(ev kız), すなわち「家の娘」、あるいは「ベイ・クズ」(bey kız), すなわち「男性である娘」と呼ばれる。家を継ぐ女性が、「ベイ・クズ」(男性である娘)と呼ばれるのは非常に象徴的である。この呼称は、家を

継ぐのは男性であるという規範の裏返しである。

なお、トルコ政府が管理する人口登録簿には入り婿を扱う項目がなく、そのため、たとえば他の村から〇村に入り婿として妻方居住をする男性の家族は、人口登録簿上は男性の出身の村に登録されることになる。また、入り婿になった場合でも、夫婦の姓は男性の姓となり、女性の姓を継ぐことはない。トルコ社会において政府機関までが入り婿をあたかも存在しないものと扱っていることは、社会全体の入り婿に対する否定的な見方を示しているといえよう。入り婿が数的にも少なく、かつ社会的にみとめられにくい存在とされていることを示している。

養子縁組みをした家族が2戸ある。1戸が兄弟の息子を、もう1戸が夫と死別し、子供のなかった女性が夫の姉の息子夫婦を養子としてとっている。兄弟の息子を養子にした男性は、その息子を自分の「バルドズ」(baldız)、すなわち妻の姉妹の娘と結婚させている。養子として自分の甥を選んだだけでなく、その養子の妻を自分の妻の親族から選んでおり、疑似親子関係の強化をはかったといえる。しかし、ここでは養子に兄弟の息子を選んだことのほうが重要である。もう一戸のほうは、夫の姉の息子を選んではいるが、はじめは夫の兄の息子を養子にするつもりであった。しかし仲が悪く養子縁組みを断られたため、しかたなく合意のとれた夫の姉の息子を養子にしたのである。この2戸とも兄弟や夫という親族の男性の息子をえらんでいる。養子自身が男性であることを望むだけでなく、養子が親族の男性の息子であることが望まれている。男性こそがその家系を引き継ぐ者とみなされているのである。

## 2-4・拡大家族、および直系家族+拡大家族

D類の拡大家族は出現率が非常に低く、4例

(5%)しかない。少ないうえに、かつて多かったとされる拡大家族の存在意義であった労働力確保としての「拡大家族」である例はこのなかにはない。夫の兄弟夫婦が同居している家族は1例だけで、夫の未婚の兄弟姉妹、あるいは配偶者と死別した兄弟姉妹が同居している家族が3例である。3例のそれぞれは、夫と死別した姉をひきとった核家族夫婦が1例、両親夫婦が近郊の町に住み未婚の妹と村に残った核家族夫婦が1例、両親夫婦が末息子と共にドイツで暮らし、村に長男の核家族夫婦と未婚の次男が住んでいる1例である。2番目の例は、未婚の娘が両親と離れてくらすという例外的なケースであるが、これは近郊の町に住む母親が生母ではなく、娘が7歳のころ父親が再婚した義理の母であることに起因する。家族のなかでも母親と娘の関係はとくに濃密であるが、血縁関係にない場合は様相が異なるのである。また、最初の例のように夫と死別した女性が兄弟のもとに身を寄せるのは、女性が1人で住むことができないからである。死別でなく離婚した女性も実家に帰り、1人で住むことはない。

夫の兄弟夫婦が同居している家族は1例ある。彼らの両親(夫48歳、妻50歳)はドイツに在住しており、彼ら兄弟(兄26歳、弟25歳)は両親の資本によって近郊の町に近いS村で共同で修理工場を営んでいる。妻たち(25歳、23歳)は、それぞれの幼児の世話をし夫たちのいない昼間を過ごす。〇村には核家族のなかにも、このような若い夫婦が単独で住むことはない。拡大家族の形をとって2組の若い夫婦が住むのは、昼間仕事にでかけて夫という庇護者のいない若い妻たちにとって都合のよい家族形態となっている。

次に、E類の直系家族と拡大家族が並存している家族をあげる。この例は、1例しかない。



両親夫婦（夫66歳，妻60歳），2人の息子夫婦（夫32歳妻37歳，夫29歳妻26歳），それぞれの未婚の子（11, 9, 3, 2歳，3, 1歳），未婚の妹（19歳）という家族構成で，父親は炭坑労働を退職して年金を受け取っている。この家庭は3世帯の夫婦が存在し，拡大家族の形態に最も近いが，裕福な層から成立しやすいとされているかつての拡大家族とは異なっている。この家族は息子夫婦が仕事をみつけて町に移住することができないために拡大家族として住んでいるだけで，村のなかでも貧しい層に入る。しかし，女性の労働力が多いため，村のなかでこの家族だけが，ニワトリだけでなく七面鳥も飼っており，副収入を得ている。また，ひとりの嫁は注射を打つことができ，町の病院で注射をするように言われた村の人々が彼女のもとに注射を打ってもらいに来る。これも少額ではあるが，副収

入となっている。

現在O村のなかで，拡大家族はD類，E類あわせても5例しかない。しかし，O村では多くの人が一時期拡大家族という形態を経験している。O村の人々はかつて家族の人数はもっと多かったと言う。なかでも，かつてO村でもっとも人数が多かったとされるある家族の男性（59歳）は，子どもの頃家族の人数は60人ほどいたという。また，別の男性（44歳）は，かつて自分の家では，6, 7人座れる食卓を7回使わないと食事ができないほど人数が多かったという。さらに父方平行イトコ婚をした男性（78歳）は，自分を含めた7組の夫婦と自分の母親と住んでいたという。同じ家には，「ダラバ」（dalaba）と呼ばれる木の壁を境として，4組の夫婦と1人の寡婦が住んでおり，その家族とは親族関係にあった（図3参照）。

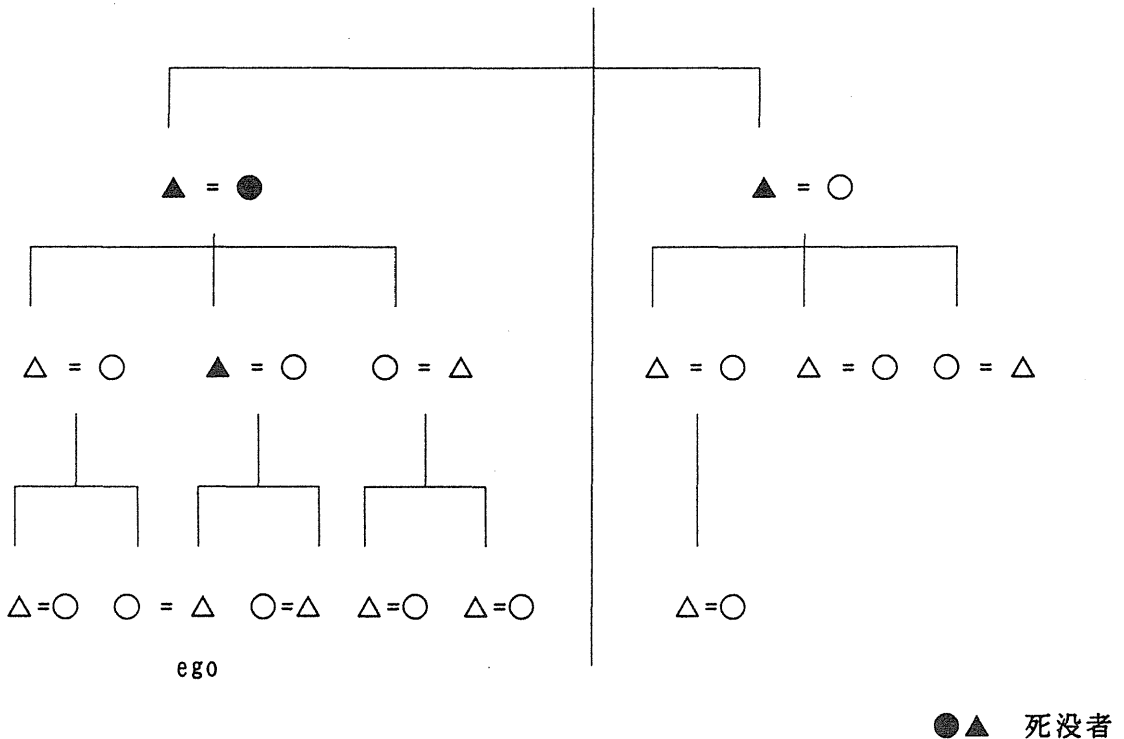


図3 ある拡大家族の家系図

この男性によれば、これは1940年代のことである。誰もが貧しかった時期に比較的裕福であったこの家には、息子がいるにもかかわらず娘を他の村から連れてきた男性と結婚させ、同居させている。農業に人手が必要であったからだという。現在のO村では、息子がいない場合にのみ入り婿をとっている。しかし、ここでは、人手不足から比較的裕福な家庭において拡大家族という形態が発現するといった社会経済的要因よりむしろ、「ダラバ」というひとつの家をふたつに区切る境の存在に注目したい。もともとひとつの家であったものを区切ってまで、彼らは独立、分裂したいのである。兄弟とは手を切る一方で、よそものを受け入れることに対して躊躇はない。こうして独立、分裂した家族も、多くの男児の出産、結婚と膨張していくなかで再び拡大家族の形態をとるようになり、そして家長である父親の死などをきっかけに分裂するという過程を辿ってきたのである。現在の核家族、直系家族の多さや過去における拡大家族のありかたから、O村では、家族は拡大よりも分裂を指向する傾向にあるといえよう。

男性は、自分以外の家長のもとの拡大家族のなかにいるのを好まず、自分が家長となった家族をおおいに拡大させたいのである。端的にいうと自分の家族をもちたいということであるが、この家族というのはよりの確には妻のことではないだろう。トルコ語で一般的に「家族」をさす言葉は「アイレ」(aile)であるが、同時に「妻」を指す。「アイレ」は女性にとっての「夫」を意味しないので、「配偶者」を指すわけではない。男性だけが「アイレ」をもつことができ、女性はできない。Delaneyは、調査した村の既婚女性に「あなたのアイレは？」と聞いたとき、彼女は困惑ししばらくためらったのち自分の実の母親や兄弟姉妹、すなわち彼女の

父親の家族について語り始めたと言っている [Delaney 1991:113]。男性が独立したい願望と家族、すなわち妻をもちたいという願望は重なっている。妻をもちたいがため独立したいといってもよいだろう。家族の形態と女性は密接にむすびついているのである。これは、Kandiyotiの言う、夫が妻の名誉の責任をもつことに結びつく証左とも考えられる [Kandiyoti 1988:278]。

## 2-5・その他の家族

上記のどれにも入らない家族形態である1例を、F類のその他に分類した。それは、2人の妻(59歳、49歳)をもつ男性(69歳)の家族である。トルコ語で2番目の妻のことを「クマ」(kuma)という。現在のO村では、85戸のなかでこの家一軒だけである。出現率は非常に少ない。過去においてもその例はそれほど多くない。2番目の妻を連れてこられた女性がかんりの抵抗をしたことを村の人々はよく語る。ある男性(1894年生まれ)が、戦争でトルコ東部の町ヴェンに兵役に行き、そこで知り合った女性をO村に連れてかえったが、O村にいた妻はヴェンからきた女性をいつもいじめていたという。また、逆の例であるが、すでに妻をもっていた男性(1880年生まれ)がO村のある家に入り婿として入ってきたが、連れてきた前の妻を新しい妻が追い出した。追い出すために新しい妻は前の妻のふとんに糞を入れたりするなどのいやがらせをしたという。最近では、10年ほど前、ドイツに出稼ぎに行った男性(当時30歳)がドイツからドイツ人女性を一時的ではあったがトルコに連れて帰った。このドイツ人女性トルコ人と結婚してドイツでの滞在許可をとらせるという商売をしていた。この男性はO村での妻と一時的に離婚し、このときはドイツ人女性と結婚していた。男性の妻(当時32歳)は自分の

クマにあたるドイツ人女性と殴り合いの喧嘩をしたという。2番目の妻に対する女性の許容度はかなり低い。

現在のO村における唯一の例であるこの家族の2人の女性は同居しており、最初の妻は「私にはどうすることもできない。我慢するだけだ」とあきらめていた。村の人々も最初の妻に対して同情しており、その男性に対しては不快感を表していた。これは「オキュズ」(öküz, 雄牛)というあだ名をもつその男性の喧嘩好きの性格や、葬式などの集まりにもでないという共同体の一員としての義務の無視や、さらには最近かつて墓地であった土地を耕してじゃがいもを植えたことなどによる彼個人の行動への非難と連動していると考えられる。しかし、何よりもこの2人の妻をもっていることに対して人々は憤っていた。なぜなら、彼女ら2人は姉妹であったからである。

ある女性(42歳)は彼について、「2人の妻をもつことならともかく、姉妹を同時に妻にするなどトルコのどこにもないことだ」と言って「恥知らず」(yüzsüz)と罵る。また、ある老女(78歳)までが、彼のことを「コムニスト」だと吐きすてるように言う。「コムニストとは何か」と尋ねても、彼女は首を振りながら「コムニストだ」と繰り返すばかりである。別の女性に「コムニスト」について尋ねると「奇妙な」(acayip)な人に対して使うという。彼女たちは共産主義(コミュニズム)との関連を認識していないが、この言葉は確実にコミュニズムを指している。

Delaneyは、調査地の村で娘を中学校に通学させた男性が村の人々から「コムニスト」と非難されていることを報告している。村の人々はコミュニズムを土地と女性を共有することと考えており、そのためスカーフ着用を禁止して

いる中学校に娘を通わせることは、娘が髪の毛をみせ、ひいては男性の共有物である娼婦になることにつながるという論法で、政治思想的には共産主義者でもなんでもないその父親をコムニストと非難しているという[Delaney 1991: 91]。また彼女は、ケマル・アタテュルクをコムニストと非難した村のイマームが裁判にかけられた事件で村が二分したことを紹介している。トルコ共和国初代大統領のアタテュルクは、言わずと知れた西欧化主義者であり、共産主義者ではなく資本主義者である。しかしイスラームと世俗主義の違いから考えれば、共産主義も資本主義も世俗主義という点においては変わりなく、その差はないに等しいと考えられているという[Delaney 1991: 227]。

O村の事例に戻って考えれば、2人の姉妹を同時に妻にしている男性を「コムニスト」と呼ぶのは、まさにDelaneyの述べた通り、根底に女性をめぐる問題が絡んでいる。O村の人たちは「コムニスト」という言葉を「奇妙な」ひとたちのことを指すと言うが、他の奇妙なひとたちに対して使われることはない。O村の出身で1980年の軍事クーデター前に左翼運動を盛んにおこなっていた、まさに共産主義者だった男性(32歳)がいるが、1人の女性と結婚して子どももいる彼に対してだれも「コムニスト」とは呼ばない。O村で「コムニスト」と呼ばれるのは、お互いに姉妹である2人の女性を妻にしているその男性だけであった。政治思想を示す言葉もO村の人たちには、女性の問題とからめて理解されるのである。

また、この家族に対して「コムニスト」だけでなく、「アレヴィ」(Alevi)という宗教的少数集団の名も使われていた。これは、男性だけでなく「彼らはアレヴィだ」と家族全体に対して使っていた。アレヴィはシーア派傾向を強

くもつ集団で、スンナ派が多数を占めるトルコにおいてその異端的な儀式、言動によりオスマン帝国の時代から今日にいたるまで迫害を受けてきた。なかでも、アレヴィの女性がスカーフを被らず、また独自の宗教儀式に男性と同席することから、スンナ派のトルコ人から「アレヴィの女性は娼婦だ」「儀式のときにろうそくを消して、母親とも姉妹とも性交する」といった誹謗中傷を受けている。民衆レベルでは、少数集団に対する非難においてもこのように女性のありかたがもっとも問題にされている。O村の人々はみなスンナ派で、その男性の家族が世襲的な集団であるアレヴィであるはずはない。しかし、村の人々の規範を超えた、姉妹である2人の妻をもつというその男性の行動が、出自としてアレヴィでなくても、彼らをアレヴィとカテゴライズするようになったのである。これは、政治思想的に共産主義者でなくても「コムニスト」と呼ばれるのと同様である。この2つは、ともに女性のありかたと深く関わっている。つまり、ここで厳しく非難されているのは、女性の共有という村の性規範を逸脱した行為に対してなのである。

### 3. まとめ

トルコの西黒海地方の一村の家族構成と女性のありかたを検討してきた。ここで明らかになったのは、女性が嫁として夫の家に居住し、夫の両親に仕えるという女性のライフ・サイクルのみではなく、むしろ、女性と男性との際立った性差ではないだろうか。家族をもつことが何よりも優先され、女性が1人で住むことはない。入り婿婚に対する否定的な見方や、養子に男性の親族の息子を優先するのは、男性が家を継ぐ、男性が家長であるという規範を維持しようとする

ものである。また、核家族や直系家族の発現率の高さと意外なほどの拡大家族の出現率の低さは、男性の独立・分裂願望の現れであり、自分の家族をもちたいという強烈な意志がそこにみられる。男性にとっての家族は、妻子というよりはむしろ妻を指し、妻の管理を夫がうけもつことが示唆される。お互いに姉妹である2人の女性を妻とする男性が強く非難されていることは、男性の妻との関係が重要視されていることの証左であろう。家族構成の分析から浮かび上がるものは、家父長制を維持することに集中し、そのなかで夫婦のありかたが重視されていることである。夫婦のありかたへの重視は、村の性規範の根幹をなす男性、女性両性のイメージの問題につながっていくが、これに関しては別稿に譲りたい。

### 引用文献

(トルコ語の文献に関しては邦訳を付した)

Delaney, Carol

1991 *The seed and the soil : gender and cosmology in Turkish village society*, Berkeley: University of California Press.

Emiroğlu, V.

1972 *Edilli köyünün (Akçakoca) kültür değişmesi bakımından incelenmesi*,

『エディリ村(アクチャコジャ)の文化変容に関する研究』Ankara: Varol.

Hinderink, J. & Kiray, M.B.

1970 *Social stratification as an obstacle to development: a study of four Turkish villages*, New York: Praeger.

Ilcan, Suzan M.

1993 *Masks of domination: the development of morality in a Turkish village*, Ann Arbor

- :UMI Dissertation Services.
- Kandiyoti, Deniz
- 1987 "Emancipated but unliberated?: reflections on the Turkish case", *Feminist Studies*, 13/2: 317-338.
- 1988 "Bargaining with patriarchy", *Gender & society*, 2/3: 274-290.
- Kıray, Mübeccel
- 1976 "The new role of mothers: changing intrafamilial relationships in small town in Turkey", J.G.Peristiany, ed., *Mediterranean Family Structures*, pp.261-271, Cambridge: Cambridge University Press.
- 松原 正毅
- 1975 「トルコの村の家族と親族ー南西アナトリアの一村の事例から」『京都大学人文科学研究 所 人文学報』39: 161-244。
- 1978 「トルコ語の親族名称・呼称体系ー南西アナトリアの一村の事例から」
- 加藤泰安他編『今西錦司博士古希記念論文集 第4巻 社会, 文化, 人類学』pp.123-218, 中央公論社。
- 中山 紀子
- 1994 「農村の女性とイスラームートルコ」片倉もとこ編『イスラーム教徒の社会と生活』pp.261-294, 栄光教育文化研究所。
- 1995 「アチック (açık, 開いた状態) とカバル (kapalı, 閉じた状態) ートルコにおける世俗化, イスラーム, 女性」『民族学研究』59/4: 453-463。
- Stirling, Paul
- 1965 *Turkish village*, New York: John Wiley & Sons.
- Yasa, İbrahim
- 1955 *Hasanoğlan köyü'nün içtimai-iktisadi yapısı*, 『ハサンオーラン村の社会経済構造』Ankara: Doğu Matbaası.

## Family structure and women in a Turkish village:

a case study from a village in the West Black Sea area

Noriko Nakayama

Profiting from Matsubara's classification, the author attempts to depict the situation of women within the family structures of a village in Zonguldak Province, Turkey. The village analyzed here has a population of 477, divided between 85 households. Most of the villagers are engaged in farming and cultivation, some men work as coal miners near the village, and some work abroad in Germany.

Matsubara's classification divides families into five categories: single family, nuclear family, stem family, extend/stem plus extended family, and 'others'.

The first category, the single family, accounts for five households, or 6% of the total. Most households of this type are composed of a grandfather or grandmother with granddaughters. Some grandfathers live alone, but not grandmothers. Women are not supposed to live alone, even the aged.

The second category, the nuclear family, accounts for 31 households (36%), the second

biggest group. Most of the couples are elderly rather than newly married. The aged couples remain after all their children have left the village —the sons in search of work, the daughters for marriage.

The third category, the stem family, comprised of 41 households(46%), is the biggest group. Usually the parents live with their youngest son. However, five households of this group are composed of parents with their daughter and son-in-law. This occurs when the couple have no son, or at least no sons available for marriage. Villagers do not respect the son-in-law and no one wants to take on this role. A man is expected to succeed to his own lineage, not to that of his wife.

The fourth category, extended family/stem plus extended family, covers only five households(6%). Among the five, there is only one case of stem plus extended family. However, villagers say they used to live in stem-plus-extended-family households in the unspecified past. As the number of household members increased, they divided the household into two parts and lived separately. The husbands wanted to be independent.

The last category, 'other' kinds of family, covers just one case: that of a man with two wives, who are sisters to each other. This husband is severely condemned by the other villagers, since his behavior violates sexual norms in the village. Owning two sisters, the man is seen as practicing an inverted version of the common ownership of a single woman by plural men, and is suspected of being a 'Communist' or member of an allegedly orgiastic Islamic sect called 'Alevi'. (Both these suspicions are entirely implausible.)

The analysis described above reveals a clear difference between the sexes. Women are not supposed to live alone; only men are supposed to inherit the lineage. The remarkably low incidence of extended/stem plus extended families, and men's inclination to be independent, may indicate that the villagers focus on the principle of private ownership of wives by husbands within the family structure.